

養護教育専攻大学院生が 『The Cider House Rules』から得たインパクト

—— 質的分析を通して ——

高橋 朋子*・栗野 智美*・佐藤 亜純*・渡辺 梨紗子*・
角田 愛**・斉藤 ふくみ***・古池 雄治****
(2019年10月23日受理)

Impact on Graduate Students of Nursing Education from “The Cider House Rules”: Through Qualitative
Analysis

Tomoko TAKAHASHI, Satomi AWANO, Asumi SATO, Risako WATANABE, Ai TSUNODA,
Fukumi SAITO and Yuji KOIKE

キーワード: 養護教育専攻 シネメデュケーション 質的記述的分析

映画が人に与える影響は多様であり、映画を用いた教育方法として、「シネメデュケーション(cinemameducation)」がある。養護教育専攻大学院生が、子どもの自立をテーマとした映画からどのようなインパクトを得たのかを明らかにするために、大学院1年次の「養護学特論演習」の授業において、『The Cider House Rules』による「シネメデュケーション(cinemameducation)」を行い、鑑賞後の受講生4名の感想を対象として質的記述的分析を行った。その結果、70コード、21サブカテゴリーを抽出した。さらに、【孤児院の子どもたちが求める愛情と権利】【経験や人との関わりによる成長】【虐待、中絶、差別、戦争等社会的背景】【既存のルールと自分たちが必要とするルール】【人生に希望や変化をもたらす愛】【周囲への感謝と誰かのためになること】【養護教諭としての成長】の7カテゴリーに分類された。学習者は現在においても生命や人権を脅かす社会問題が多く存在していることを認識し、主人公を通して子どもの欲求充足・成長過程について考えることで、自分自身の成長と重ねあわせながら、養護教諭としてできることは何だろうと深く洞察していた。そのことは、生命倫理を学ぶことと同時に養護教諭としての職業意識の確立の一助となったと考える。

はじめに

*茨城大学大学院教育学研究科養護教育専攻

**群馬県利根郡川場村立川場小学校

***関西福祉科学大学健康福祉学部健康科学科

****茨城大学教育学部教育保健教室

映画が、人に与える影響は多様である。作品を観て、感動を覚えたり、主人公に感情移入して喜怒哀楽をともしたりすることもあるだろう。映画作品を鑑賞することを通して、自分を見つめ直す機会となり、物事の考え方や見方、価値観に変化をもたらすなども考えられる。時に、社会問題を作品のテーマとして取り上げられることも多く、世界で起きている環境問題や AI の発展、生命などについて考えるきっかけとなることもある。また、ストレス発散や息抜き的手段、趣味として映画鑑賞が挙げられることも多い。映画が人にもたらす影響は文化・芸術面ばかりではなく、心理面など多角的である。

映画を用いた教育方法として、「シネメデュケーション (cinemeducation)」がある。「シネメデュケーション (cinemeducation)」とは、「cinema」+「medical」+「education」と三つの単語を合わせて作られた造語で、1994年にアメリカの Alexander 博士により提唱された。映画作品には、医療倫理や家族や友人など大切な人の死を扱った作品や現代の社会や教育界における問題を扱った作品が多く存在し、現在医療現場の研修等、医学教育方法として用いられている。Nuttha ら (2009) によって、「シネメデュケーション (cinemeducation)」は、学生のためのプロフェッショナルリズムの学習を促進するもう一つの効果的で楽しい方法であることが証明されている¹⁾。学校教育においても、道徳教育の教材として用いられた例もある²⁾。

また、仁平ら (2016) は、「シネメデュケーション (cinemeducation)」により「映画が提起するさまざまな課題を体験的に学びながら、学習者自身が思考し、自らに問うていき、学習者同士の対話的な自由な学びのなかで、人間的発達が相互に共有されながら、思考の深化、価値の葛藤、文化の再吟味が期待でき、また一定の有効性が認められた³⁾」としている。看護学を学び、医療についても学ぶ機会がある養護教育専攻の大学院生にとっても、「シネメデュケーション (cinemeducation)」は、プロフェッショナルリズムの学習において有効性があると考えられる。

このことから、大学院1年次の授業「養護学特論演習」の一環として、『The Cider House Rules』による「シネメデュケーション (cinemeducation)」を行った。鑑賞した『The Cider House Rules』は、1999年にアメリカで製作された作品である。2000年には、アカデミー作品賞にノミネートされ、マイケル・ケインがアカデミー助演男優賞、原作者のジョン・アービングがアカデミー脚色賞を受賞した。孤児院で育った主人公のホームーが、様々な経験を通して成長し、自分の居場所を見つける過程を描いた映画である。この映画作品では、虐待、妊娠中絶、近親相姦、戦争など様々な問題が取り上げられている。養護教諭として、被虐待児と接することや妊娠中絶、近親相姦に悩む生徒に出会うこともあるかもしれない。養護教諭としての受講生各自の「自分」を考えるにあたり、『The Cider House Rules』はどのようなインパクトを与えたのかを明らかにするために、鑑賞後の受講生4名の記述を対象に質的記述的分析をした。

研究方法

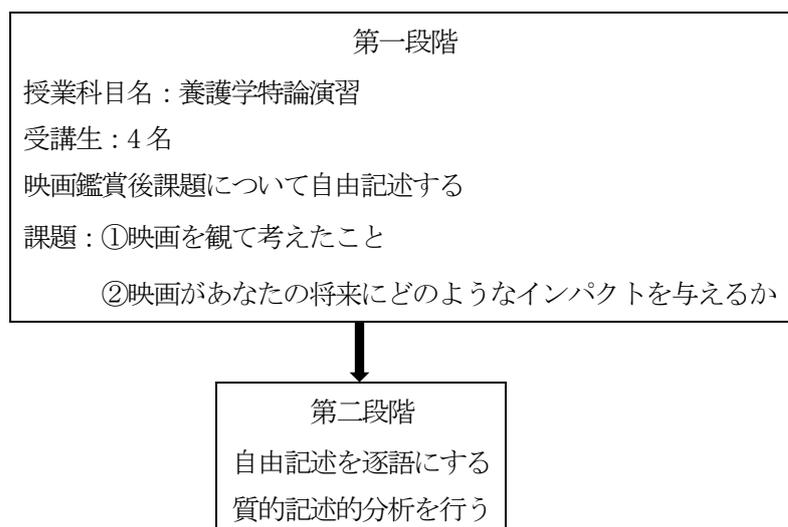
分析方法は質的記述的分析を用いた。分析の手順は以下の通りである。

手順1：受講生4名が『The Cider House Rules』鑑賞後、①考えたこと②この映画が与えたインパクトについて記述させる。

手順2：受講生が記述した逐語からまとまりのある内容の記述をデータとしてまとめ、さらにデータを概念化してコードを抽出する。

手順3：集められたコードから類似するものをまとめてサブカテゴリー化し、さらに抽象度を高めカテゴリー化する。

手順4：カテゴリー化したものを図式化し、内容の検討を行い構造図を作成する。



結果

『The Cider House Rules』を観て何を考えましたか。』『The Cider House Rules』を観て、この映画はあなたの将来にどのようなインパクトを与えますか」という問いに対する受講生の自由記述の逐語からまとまりのある内容をコードとして抽出し、コードを概念化して類似するものをサブカテゴリー化し、70コード、21サブカテゴリーを抽出した。さらに抽象度を高めてカテゴリー化した結果、【孤児院の子どもたちが求める愛情と権利】【経験や人との関わりによる成長】【虐待、中絶、差別、戦争等社会的背景】【既存のルールと自分たちが必要とするルール】【人生に希望や変化をもたらす愛】【周囲への感謝と誰かのためになること】【養護教諭としての成長】の7カテゴリーに分類された（表1）。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを「 」で示す。

【孤児院の子どもたちが求める愛情と権利】は、「孤児院の子どもたちは親の愛を求めており、誰もが幸せになる権利がある」「これまでの孤児院の印象と異なり映画の孤児院は家庭的な温かさがあり、子どもの成長を支える優しさにあふれていた」の2項目のサブカテゴリーが含まれた。【経験や人との関わりによる成長】は、「周囲の大人のかかわり方や環境が子どもの成長にとって大切である」「社会の問題に直面し、どう考え、決断していくのか、主人公と一緒に考え、成長したような気持になる映画であった」の2項目のサブカテゴリーが含まれた。【虐待、中絶、差別、戦争等の社会的背景】は、「虐待、妊娠中絶、近親相姦、戦争など重苦しい社会的なテーマで、登場人物も複雑な問題を抱えていた」「禁断である人工妊娠中絶を行う場面は、現代における妊娠中絶問題を反映していた」の2項目のサブカテゴリーが含まれた。【既存のルールと自分たちが必要とするルール】は、

「ルールはそこに住んでいる者が決めるものであり、住んでいない者が決めるのではない」「法律だけでは人は救えない、誰の心にも自分なりのルールがある」等4項目のサブカテゴリーが含まれた。

【人生に希望や変化をもたらす愛】は、「孤児院のおやすみのシーンは、愛が込められていて希望を感じる」「深い愛情を受けていたことに気づき主人公は成長し、人生の選択をした」等3項目のサブカテゴリーが含まれた。【周囲への感謝と誰かのためになること】は、「これまでの家族の支えに感謝し、広い視野を持ち自分も誰かのためになれる人でありたいと考えた」「外の世界を知り、自分がいつも孤児院の人々に支えられていたことに気づき、孤児院に戻り医師の後を継ぐことに大きな意味がある」の2項目のサブカテゴリーが含まれた。【養護教諭としての成長】は、「試行錯誤を繰り返しながら養護教諭として人として成長していきたい」「養護教諭としてまっすぐな愛を伝えたい」等6項目のサブカテゴリーが含まれた。サブカテゴリーに含まれる代表的なコードは表1の通りである。

表1 大学院生のレポートから得たカテゴリー・サブカテゴリー・代表的なコード

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
孤児院の子どもたちが求める愛情と権利	孤児院の子どもたちは親の愛を求めており、誰もが幸せになる権利がある。	里子を希望する夫婦が、子どもを見定めるシーンでは、自分を選んでと微笑を返す子どもたちの表情が切なく、「私を愛して、ここから出して、お父さんとお母さんがほしい」と叫ぶ子どもの声が聞こえてきた。
		孤児院の子ども達が「よい子」にふるまう様子から、命の重み、誰もが幸せになる権利があることを感じ、命の尊さを忘れずにいたいと思った。
	これまでの孤児院の印象と異なり映画の孤児院は家庭的な温かさがあり、子どもの成長を支える優しさにあふれていた。	これまでの孤児院の印象は監獄のようで、冷たい、寂しいものであったが、この映画の孤児院は家庭で過ごしているような温かさが感じられた。
		ラーチ医師は、孤児院の子どもを本当の子どものようにかわいがっていた。孤児院でなければ経験しない哀しみを抱えている子供たちを自分のことのように感じていた。
経験や人との関わりによる成長	周囲の大人のかかわり方や環境が子どもの成長にとって大切である。	周囲の大人の関わり方が子どもの成長にとって大切である。
		この作品は、環境が子どもの成長にどのように影響するかを考えさせる作品であった。
	社会の問題に直面し、どう考え、決断していくのか、主人公と一緒に考え、成長したような気持ちになる映画であった。	孤児院の生活しか知らない純真な青年が、社会の問題に直面し様々な経験を通して、どう考え、決断していくか難しい選択になる場面で自分だったらと考えさせられた。そこに映画の価値があるのかもしれない。
		様々な想いを残していきながら、主人公と一緒に成長したような気持ちになる映画だった。
	最終決断は自分であるが相談することも大事である。	

虐待, 中絶, 差別, 戦争等の社会的背景	虐待, 妊娠中絶, 近親相姦, 戦争など重苦しい社会的なテーマで, 登場人物も複雑な問題を抱えていた。	登場人物は, みな優しいおだやかな人柄だったが, 社会的に認められない問題を抱える複雑な人物が多かった。
	禁断である人工妊娠中絶を行う場面は, 現代における妊娠中絶問題を反映していた。	近親相姦や性犯罪等望まない妊娠が後を絶たないこと, 出生前診断の染色体異常検査による人工妊娠中絶の増加は医療の発達によって出てきた問題であり, パートナーとの家族計画, 出生前診断についての話し合いは重要である。
		命の尊さを理解していたから, ラーチ医師は墮胎手術を続けていた。
既存のルールと自分たちが必要とするルール	ルールはそこに住んでいる者が決めるものであり, 住んでいない者が決めるのではない。	黒人たちはりんご農場のルールが読めず, ルールを無視した生活をしていたが, 「ルールはそこに住んでいる者が決める, 住んでいない者が決めるのではない」という台詞が印象的だった。
	法律だけでは人は救えない, 誰の心にも自分なりのルールがある。	平等な環境があつて, ルールは機能するものであり, 法律だけでは人は救えない現実の厳しさ, 社会の不条理を象徴しており, 誰の心にも自分なりのルールがあるはずである。
	社会のルールと個人の意思 2 つのバランスを取っていくことが重要であり, そのルールは人の役に立つものであれば素敵である	今を大事に生きることで未来は開かれていく。人には内なるルールがあり, それが人の役に立つものであったら素敵だ。
		社会のルールと個人の意思の尊重のバランスが生き方に影響することが分かった。
		法律や規則等のルールを守ることも大切であるが, 一人一人の意思を尊重することも大切である。
	時には, 勇気をもって新しいルールづくりが必要である。	ルールが無意味な場合もあり, ラーチ医師が妊娠中絶を行ったように, 時には新しいルールへ一新することも大切である。
		新しいことに挑戦することは勇気が必要だが, 時には思い切って自身を信じて新たなルールづくり, 改革が必要である。
人生に希望や変化をもたらす愛	孤児院のおやすみのシーンは, 愛が込められていて希望を感じる。	ラーチ医師が言う「おやすみ, メイン州の王子たちよ, ニュー・イングランドの王たちよ」という言葉には子どもたちへの愛がこめられていた。ホーマーにもそれが受け継がれており, 小さな希望を感じた。
	深い愛情を受けていたことに気づき主人公は成長し, 人生の選択をした。	ラーチ院長から子どもたちへの愛, ホーマーと女性との愛, 親子愛等様々な形の「愛」について考え, ラーチ院長の深い愛がホーマーへ変化をもたらした。
	恋は人生に大きな影響を与える源であった。	キャンディーとの恋も, 彼が人生を考えるきっかけとなった大きな要因である。

周囲への感謝と誰かのためになること	これまでの家族の支えに感謝し、広い視野を持ち自分も誰かのためになれる人でありたいと考えた。	私自身一人暮らしを始めてから、改めて今までどれだけ自分が家族に支えられて生きてきたのかを実感した。広い世界に出ているいろいろなものを見なければ、今あるものの良さにさえ気付かないこともあるかもしれない。これからの人生、挑戦すること、また原点に帰ることを恐れずに物事に取り組み、広い視野で物事を見ていきたいと思った。
	外の世界を知り、自分がいつも孤児院の人々に支えられていたことに気づき、孤児院に戻り医師の後を継ぐことに大きな意味がある。	いつも自分がラーチ医師や孤児院の面々に支えられ続けていたことを理解し、孤児院に戻った。外の世界を知ってから、孤児院に戻り、医師の後を継ぐことに大きな意味があるだろうと思う。
養護教諭としての成長	子どものために必要な譲れない養護教諭の根幹をなすルールは、いつの時代にも変わることはない。	法律や規制は、時代や社会の変化に応じて変更されていくが、子どもにとって必要である、譲れないという養護教諭としての根幹をなすルールは、いつの時代にも変わることなく大切にしていきたい。
	試行錯誤を繰り返しながら養護教諭として人として成長していきたい。	『The Cider House Rules』を観て得た感情を忘れずに、様々な試行錯誤を繰り返しながら、養護教諭として、人間として成長していきたいと思った。
	様々なことを学びよい人生を送ることができるよう子どもを支えていきたい。	私もこれから養護教諭になった際、いろいろな子供たちに出会うことがあると思う。いつか子供が大人になった時、ホームーのようにさまざまことを学びながら良い人生を歩むことができるように子どもたちを支えていきたいと考えた。
	養護教諭としてまっすぐな愛を伝えたい。	養護教諭も言葉や表情、アタッチメントを通して、子どもたちに愛を伝えており、自分も無償の愛を与えられるような、自分自身を大切にできる養護教諭となって、子どもたちにまっすぐな愛を伝えていきたい。
	子どものニーズを的確にとらえ意思を尊重しながら判断対応することの大切さを学んだ。	この作品から、子どものニーズを確実にとらえ、適切な対応を判断し、実行する大切さを学んだ。 学校現場においても子どもたちの課題は変化し、多様化していくため、その変化に伴う生徒指導、保健指導、教育現場の改善を続けていくことが大切である。
養護教諭は最新の知見を求められている、自分の中にある物差しを変えることも大切である。	時代の変化に伴う子どもたちの健康課題の変化に対応するため、養護教諭には最新の知見を得ることが求められること、そして、時には今までを疑うことで自分の中にあるものさしを変えることが大切であると学んだ。	

考察

1. カテゴリーの関係性

本研究では、妊娠中絶などの社会的な問題を取り上げた映画『The Cider House Rules』を通して、学習者がその問題をどのように認識、分析、解釈し、学習者自身の将来にどのようなインパクトを

与えたかを質的記述的分析により明らかにした。その結果をカテゴリーの関係図として図1に示す。カテゴリーを【 】で表記した。

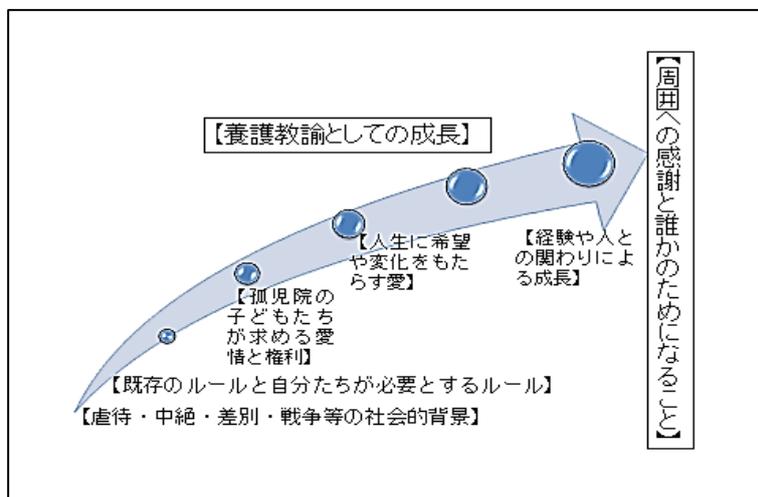


図1 カテゴリー関係図

分析の結果から、まず本映画が持つ中心テーマである【虐待・中絶・差別・戦争等の社会的背景】に関して、いつの時代でも世の中に変わらず存在する社会問題として認識していた。そこには、【既存のルールと自分たちが必要とするルール】があることを、映画の主人公が経験する様々な出来事を通して考えていた。映画の中で特に印象深いシーンとしてあげていた孤児院の子どもたちの生活には、【孤児院の子どもたちが求める愛情や権利】【人生に希望や変化をもたらす愛】という深い慈しみと愛情が必要であり、そこには愛情あふれる重要な他者が存在することで、【経験や人との関わりによる成長】が得られると解釈していた。そして、最終的には映画の主人公が【周囲への感謝と誰かのためになること】を目指した職業選択や自分らしい生き方を見つけ自己実現していく成長過程に、学習者自身を重ね【養護教諭としての成長】についても深く洞察し、養護教諭としての職業意識の確立の一助となっていたことが捉えられた。カテゴリー関係図では、厳しい社会状況・背景を抱えながらも、子どもが周囲からの愛情を受け、経験を通し成長していく未来への可能性を示すエネルギーがだんだんと大きくなっていくエネルギー量を矢印で表現した。それは、【周囲への感謝と誰かのためになること】という目標に向かって、自己実現する成長の過程であると考えた。

映画『The Cider House Rules』は、虐待・中絶・差別・戦争などの問題を具体的に提起する作品であり、特に妊娠中絶の問題を通して、生命倫理の観点から命の尊さ、性的虐待、性と生殖に関する権利、法律・規則の矛盾や限界、自分の信念ともいえるルールについて問い続けている。映画『The Cider House Rules』は、生命倫理を考えるシネマドキュメンテーションとしても、効果的な作品であったと考える。

2. 子どもの成長と養護教諭としての成長（養護の基本原則）

記述データから創出した7つのカテゴリーについて、マズローの欲求5段階説を参考にしながら、子どもの欲求充足・成長の側面と養護教諭としての成長（養護の基本原則）の側面⁴⁾を考察し、子どもの成長と養護の構造図（図2）を作成した。マズローは人間の基本的欲求を低次から5段階に

分類し、「生理的欲求」「安全への欲求」「集団所属や愛情の欲求」「自尊心や他者による尊敬や承認の欲求」が順次満たされてくると、「自己実現の欲求」に動機づけられるとしている⁵⁾。孤児院で育てられた主人公ホームーの成長過程についてもこの理論に基づいて説明することができる。

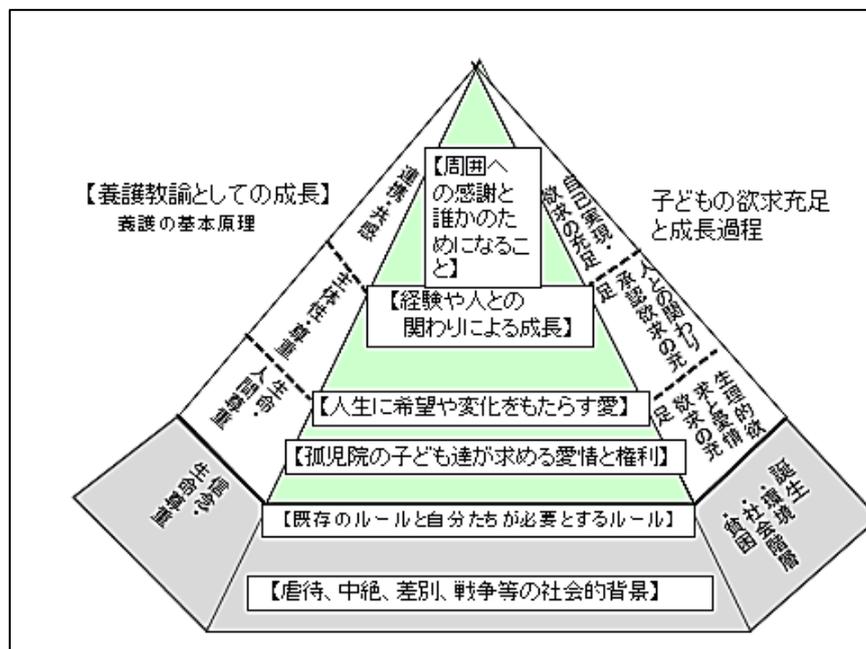


図2 子どもの成長と養護

また、大谷ら⁶⁾は「養護」の目的は、未熟で成長・発達過程にある子どもたちがその子なりの可能性を伸ばし、一人の人間として成長し、自立することが出来るように支援することであると定義している。さらに、養護する側の子どもに向きあう姿勢を養護の基本原則として①生命・人間尊重の原理（「あなたは大事な存在」と認識して向き合う）、②主体性尊重の原理（「あなたの生活の主人公はあなた」として認識して関わる）、③共感・連帯の原理（「あなたによって私は育つ」と相互作用に感謝する）をあげている。これは、学習者が映画から受けたインパクトが自分の将来にどのように影響したかを考えた時に、「養護教諭としてできることは何か」と自身に問いかけた養護の本質とも言える。

これらのことを踏まえて、【虐待・中絶・差別・戦争等の社会的背景】は、いつの時代でも不条理な社会問題が存在すること、【既存のルールと自分たちが必要とするルール】は、人々を守るためにあるはずの法律が時には弱者を生み苦しめている現実があることを示し図の地下部分に配置した。これは、マズローの5段階説の一番下の層の下、ピラミッドの地下部分になる。例えば、性暴力によって傷つけられると、このピラミッドの地下の層が破壊され、生きるために食べ物を摂ったり、体を健康に保つといった生理的欲求に属することがどうでもよくなってしまふ、生きることがどうでもよくなってしまふといった感覚である。人間としての尊厳の部分であり、自分の存在や生きることへの欲求がまず必要であると考えた⁷⁾。言い換えれば、人間は誕生した時にすでに社会的階層や差別の中に置かれているといえる。20世紀中頃における映画の登場人物が経験する様々な出来事が現実の厳しさを突き付けてくるが、この問題は過去の問題ではなく現在も続いている問題である

ことにも気づく。とりわけ日本においては虐待による死亡やいじめによる自殺、過労死の問題、十代の妊娠中絶、さらには、出生前診断検査による妊娠中絶の是非などが現在の大きな社会問題となっている。学校教育の中でもこの複雑な社会問題に対して、チームとして対応が求められている⁸⁾。養護教諭はその職の特性からいち早く問題に気づくことも多い。子どもをそのまま受け入れ、「あなたは大事な存在」であるということを伝えることから関係が始まるといえる。

次に、【孤児院の子どものたちが求める愛情と権利】【人生に希望や変化をもたらす愛】【経験や人との関わりによる成長】の段階では、まず子どもの成長にとって、安全・安心は欠かせない基本的な生理的欲求である。さらに愛情欲求の充足として、重要な他者からの愛情が満たされることで基本的な信頼関係を形成し、新たな外界の社会での経験へと動機づけられる。生理的欲求や集団所属・愛情欲求が十分に満たされると、人との関わり欲求や集団内での承認欲求の充足へとつながっていく。この段階では、養護教諭は子どもを受容し温かく見守るだけでなく、子どもの主体性を尊重した関わりも必要となってくる。

そして、【経験や人との関わりによる成長】をとおして、最上部には自己実現欲求の充足として【周囲への感謝と誰かのためになること】を目指した職業選択や自分らしい生き方を見つけていく成長過程があると考え。養護教諭はこの成長過程を意識して子どもと関わることで、子どもと一緒に養護教諭自身も様々な経験を通して成長できる相互作用が生まれ、自己肯定感を高めていくことになる。

映画『The Cider House Rules』から得たインパクトについてまとめた結果、学習者は現在においても生命や人権を脅かす社会問題が多く存在していることを認識し、主人公を通して、「子どもの欲求充足と成長過程」について考えることで、自分自身の成長と重ねあわせながら、養護教諭としてできることは何だろうと深く洞察していた。そのことは、生命倫理を学ぶことを通して【養護教諭としての成長】と同時に職業意識の確立の一助になっていると考える。

3. 映画を通して考える生命倫理

浅井らは、『映画を見ながら生命倫理を学ぶ利点は、問題を実感できる、強い感情が引き起こされる、様々な立場を追体験することができる、登場人物に対する反応を通して、「どのような人間であるべきか、どのような性質（特性）を持つべきか」という問題を考えることができる。有徳性に関する教育的意義は医療専門職のプロフェッショナルリズム教育においても意味を持つだろう」と述べている⁹⁾。このことは養護教諭にも当てはまることではないだろうか。学校を取り巻く課題は極めて多種多様であり、いじめ・不登校などの生徒指導上の課題や貧困・児童虐待などの課題を抱えた家庭への対応、保護者や地域との協力関係の構築、インクルーシブ教育システムの構築の理念を踏まえた発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応、自然災害や不審者による死傷事件を含めた学校安全への対応など、新たな教育課題が指摘されている¹⁰⁾。養護教諭自身が生命倫理・法・社会・心理・文化・宗教的な諸問題を的確に認識し、チームとして適切かつ迅速に対応することで、子どもの生命を守り、養護の質をさらに向上させることができると考える。そのためには、倫理的観点から課題を自ら発見し、探求し、解決する専門職としての実践的教育が必要である。

今回、映画『The Cider House Rules』を視聴し、レポートとして「映画を観て何を考えたか」「この映画は、あなたの将来にどのようなインパクトを与えようと思うか」の2点について記述する課題が課された。レポート作成を通して、学習者は映画の世界での出来事を改めて解釈し、現代社会にお

いて共通する社会問題や自分自身の行動の倫理的意味を考える機会となった。先行研究では、「映画を通して考える生命倫理」の授業構成や教材例¹¹⁾、シネメデュケーションの教育方法と課題などの報告¹²⁾は少なからず認められるが、学習者の思考過程を分析した研究は少ない。本研究は、映画を通して学習者自身が何を考え、自分の将来に影響を与えたかを真剣に考えまとめたレポート内容を質的記述的分析法で整理した意義は大きいと考える。日常的に生命倫理について考える機会は極めて少ない。映画を用いた教育により、鑑賞者としての距離を取りながらも生命倫理の意味を深く考え、強烈なインパクトを与えられた結果、妊娠・中絶の問題、近親相姦、差別や貧困、養護施設に入所している子ども達について、固定観念の修正や法的な問題を含めた社会の在り方について考える貴重な経験となっていた。途中退席を保障されたうえで、教育者からの介入を受けずに全編を視聴したことによる学習効果が大きかったともいえる。

4. 本研究の課題と限界

本研究により、養護教育専攻大学院生4名が、映画『The Cider House Rules』から影響を受けた内容について明らかにすることができた。しかし、学習者が4名と少ないために、今後は、養護教育専攻以外の大学院生との内容比較や養護教諭専攻の大学院生の人数を増やした内容分析が必要であると考える。

注

- 1) Nuttha L, Naruchorn K, Nuttorn P, Danai W .2009."Cinemeducation: A pilot student project using movies to help students learn medical professionalism. *Medical Teacher*,31, 327-332.
- 2) 上藺恒太郎「生命尊重の総合的な学習を広げる映画活用の提案—中学生が映画「うまれる」を観て思ったこと—」『長崎総合科学大学紀要』第58巻(2018), 67-10.
- 3) 仁平成美, 瀧澤利行「医学教育方法としての「シネメデュケーション (cinemeducation)」—その方法の系譜と課題—」『茨城大学教育学部紀要』第65巻(2016), 307-322.
- 4) 笹川まゆみ, 砂村京子, 高橋朋子他「二尾の対応から見た「養護」に関する研究 第2報—慢性疾患を持つ子どもの自己成長に着目して—」『日本養護教諭教育学会』第6巻第1号(2003), 56.
- 5) 岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修『発達心理学辞典』(ミイネルヴァ書房, 1995), 257.
- 6) 大谷尚子・門田美千代・楠本久美子他『養護学概論』(東山書房, 2000), 19-20.
- 7) 大谷尚子: 養護覚え書『「養護教諭」の基礎基本』(ジャパンマシニスト社, 2018), 88-93.
- 8) 中央教育審議会『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申)』(2015), 28-29.
- 9) 浅井篤, 牧左希子, 福山美季『「映画を通して考える生命倫理」授業に関する報告』『大阪大学紀要』医療・生命と倫理・社会, 第10巻 (2011), 47-48.
- 10) 中央教育審議会『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)』(2015), 13-14.
- 11) 前掲書9), 47-58.
- 12) 前掲書3), 307-322.